

音韻と要素との相対関係

— ユ ・ ボ の 場 合 —

十 河 直 樹

1 はじめに

- (1) 日本語には、今に揺れている数語の共通語がある。「日本」をニッポン、ニホンと呼ぶか、「鮭」をシャケ、サケと呼ぶか。「端」をハジ、ハシと呼ぶかどうかといった類である。さらに「行く」をイクかユクか、国語学者で意見が別れる。
- (2) さらに、同音意義語という世界があって、コウエンと呼んでも「講演」か「後援」か「公演」か迷う。
- (3) わたしは、音には①単なる音だけの世界を位置している事ではなく、②ある範囲の要素が内包されてあるように感じる。

2 ユ・ボ音の表記上の歴史的背景

- (1) ユという音の形成がいつごろ（時代）形成され、我国で定着した音となったかについては不詳。

ただ、大野 晋氏¹の『奈良時代の音節数の推定と万葉仮名』によれば、「一東国の音韻体系は、畿内とはかなり相違していたことが推測される。一」その畿内の音韻体系を五十音図にあてはめた表示によると、ユは「江」と表記されてあるさらに、時代をくり下げてみると、『古事記』『万葉集』、『日本書紀』と分け記下のごとくに掲載してある。

上古の表音文字一覧表

	推古期	『古事記』『万葉集』	『日本書紀』
ゆ	由	由、遊、諭、湯	由、諭、愈、瑜、踰、與、庚

(2) ボの音は、平安末期よりやや定着。

推古期	『古事記』『万葉集』	『日本書紀』
ば	煩、菩、番、蕃	煩

(3) わたしは、ユ・ボに付いての史学的な研究、系統などの研究、表記等の研究をしているのではなく、ユ・ボの音韻に関係する表記（漢字、用字）に關与するそれぞれの要素を対立させその共通要素、差異要素を明らかにし、差異点の素が何によるものであるか。なぜ、その点が差異として浮かび上がるのかをつまびらかにしたい。

3 ユの音韻と要素との関係

		要 素
ユ	意 味	①——②
湯	水を熱くしたもの。または、水が熱くなったもの。	○
由	よりどころ。よってきた筋みち。いわれ。わけ。	○
油	液状になっているあぶら。雲が盛んに起こるありさま。	○
癒	病気や傷がなおる。なおす。	○
諭	言いきかせて教える。教えみちびく。さとす。さとの。	○
俞	物を抜きとる。	○
喩	たとえる。たとえ。（たとえを引いて）納得させる。	○
愉	たのしい。 (心のわだかまりりを取り去って) せいせいすること。	○
與	しばらく。わずかのあいだ。すすめる。	○
踰	越える。こす。すぎる。わたる。進む。おどる。 とびこえる。まさる。いよいよ。ますます。	○

(1) 上記の表は、ユと言う音に対し、漢字を当て、その意味を右に記録した。注目したい点は、右端の要素の欄である。

(2) 都合10語のユに関係する用語のうち、すべての用語が、何らかの原因があつてそれを何らかの方法を用いて除去、越える、あるいはその方向へ寄せようと働きかけている点を納得することができる。例えば、ユ（湯）は、水から→沸騰（煮えたぎる）までの途中のものを指す。ユ（油）は、液体→固体の途中の液状のも

のを指し、言うまでもなく半流動体のもので、固体でも液体でもない。という様に、原因があって結果があるまでの途中を意味する点に、注目してもらいたいのである。

4 ュの応用力

(1) ュの検討

ュが、原因があって結果があるまでの途中を意味する要素をもっているとすれば「行く」は、イクと呼称することはおかしいことになる。ユクが当然な呼称の姿で、イクはその派生系、もしくは訛形という理屈が成り立つ。A地点からB地点に動く（働きかける）ことを意味する要素を内包している「行く」は、当然ユクと発音するべきである。

(2) ュ+ウ（ゆう）言う、有、優、夕、友、結う、幽、郵。etc.

言う（ゆう）は、イウでなく、ユウで（自分の心に思うことを）言葉で（相手に表す。A→B

有（ゆう）は、ある。存在する。無→在

優（ゆう）は、しとやか。すぐれている。まさっている。並→秀

夕（ゆう）は、日が暮れかかっている時。日暮れ。日中→夜

結う（ゆう）は、まとめてむすぶ。ばらばら→束ねる

幽（ゆう）は、世間に出ないでかくれている。ひそむ。生→死

郵（ゆう）は、官営で文書、物品等を運送する制度。A→B

と言うように、ユにウが付加されたユウといった形態をとってもユ本来の要素は崩れていない。

ボと言う音はどうであろう。

5 ボの音韻と要素との関係

ボ	意	味	要素	
			有	無
菩	ほとけのざ。香草の一種。		→	
墓	はか。		→	
暮	暮れる。日暮れ。		→	

莫	日ぐれ。ゆうぐれ。ない。しずか。さびしい。	→
簿	文を書く薄っぺらなもの。帳面。すだれ。	←
母	はは、生みだすもとになるもの。年長の女。もと。	←
募	つのる。広く求める。	←
慕	したう。ないものをほしがって思いを寄せる。	←
牡	おすの牛。鳥獣の雄。かぎ。	←
姆	かしすぎ。つきそって婦道を教える婦人。	←
拇	おやゆび。	←
姥	うば。つきそい。ばば。	←
媽	はは。ばば。下女。	←

註)

→ 有るものが無くなる ← 無いものから生れる

- (1) 表示した13語のボに対する用字の要素を検討した。9/13が←で無いものから生れる。4/13が→で有るものが無くなる。
- (2) この数字の意味することは、物事の分岐点を意味しているとも考えられる。例えばボ(暮)は、暮れる。ではあるが、それはやがて暁を観ることの前兆であるとも考えられる。(墓)に至っても同様の解釈ができる。
- すなわち、ボは有→無→有と連動(輪廻)の要素を内包しているとみる。

6 ボの応用力

(1) ボの検討

ボは、有→無→有と連動(輪廻)の要素を内包していると言った。

(2) ボ+ウ(ぼう) 某、棒、坊、亡、忙、防、冒、帽。etc.

某 (ぼう) は、あるもの。さる人。不明の時、または人。有←無

棒 (ぼう) は、手に持ったりになったりできる程度のまっすぐな細長い木。

有←無

坊 (ぼう) 区別されたまち。僧の住むところ。幼い男の子の愛称。生→死(司る)、有物↔有物(境)(幼い子は僧に似た頭をしている為)

亡 (ぼう) は、なくなる。うしなう。ほろびる。有→無

忙 (ぼう) は、せわしい。仕事が多くてひまがない。有→無

防 (ぼう) は、つつみ。ふせぐ。まもる。有→無

冒 (ぼう) は、おおう。かぶる。おかす。有→無

帽（ぼう）は、頭にかぶせておおう布。有→無

（３）ヤ+ボ（やぼ）野暮

野暮（やぼ）は、世の中のことに通じず、人情の機微を解さないこと。また、趣味などの洗練されていない人。

暮（ぼ）は、〔→有るものが無くなる〕という要素を内包している通り、本来人として修練、修行の末、人情の機微を重厚に持ち得るはずの度量を修得できない（しようとしなかった）。

7 むすび

- （１）わたしは、当初レイ（零、霊etc）について、その音韻と用語の相対関係を論じてみたいと考えていた。しかし、一音節の要素を探究するだけでも多大な労力の必要なことを知り、数年暖めていたユの音節を発表するに漕ぎつけた。
- （２）ユは、母韻のイと混用されることが多く、柚をイズ、床をイカ、ゆかいをイカイと用いている地域は西日本でも、四国西部には広く分布している。これはユがイから派生した音であるのか疑問をもったこともあったが、イの音素が強いことに奇異したものと察した。
- （３）ボは、ホー、ホウ、ホを研究している途中で、ホという音韻は方向、方角、末端先、端、先端、頭頂、といった要素を内包した用語のジャンヌに用いられているのではないかということを察した。
- （４）すなわち、現代五十音図表は、清音、濁音、半濁音、拗音、撥音、促音の５０音から形成されている。基本的には $5 \times 10 - (2 + 3) = 45$ に撥音「ん」を加えた表である。と同時に、５０文字表＝５０音表でもある。つまり、カイは「かい」ではあるが＝「貝」か「下位」かは分からない。「分かっている」と日本人同士は理解しあって言語生活をしているだけである。

音と文字とは、本来別別の機能があって、社会機能の上に文字を当てて用いているのが現代常用漢字、当用漢字の類であろう。音は、別のエリアを組織して在り、そのおのおののエリアには、明確な要素があるとみる。

- （５）こうして考えると、音素図表というものが考案でき、五十音図表とは別な角度からの「日本語音素図表」の形態を鑑みることができそうである。

註)

柴田 武編「朝日小事典 現代日本語」朝日新聞社 1976年

大野 晋「岩波講座 日本語 5 音韻 音韻の変遷(1) 1977年